



Title	漢字仮名交じり文中における片仮名表記の選択 : 博文館『太陽』前誌群を資料として
Author(s)	深澤, 愛
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2003, 37, p. 37-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47915
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

漢字仮名交じり文中における片仮名表記の選択

— 博文館『太陽』前誌群を資料として —

深 澤 愛

一 はじめに

近代語における表記の研究において看過できない現象の一つが、外来語などを中心とする、片仮名表記の使用法の変化である。深澤(二〇〇三a)⁽¹⁾は、外来語表記が漢字表記から片仮名表記へ移行した要因を探るために、博文館の総合雑誌『太陽』(明治二八―昭和三三)を資料に、漢字平仮名交じり文における、外国地名の「表記選択」について調査・考察した。「表記選択」は、「文字列を構成する文字及び符号を選択すること。具体的には、文字列に漢字・平仮名・片仮名・アルファベットなどのいずれを用いるかを選択する、あるいは文字列に鍵括弧・一重傍線・二重傍線など、一語であることを示すことを主目的とする符号を付けるか否かを選択すること。」のように定義されるものである。深澤(二〇〇三a)は、文語文体・口語文体の別と、漢字表記・片仮名表記の選択との関係を調査した結果⁽²⁾、外国地名における、片仮名表記への移行を促進した要因は、外国地名の定着というよりむしろ、外国地

名の定着により表記選択が口語文体からのはたらきかけを受け入れやすくなったことであると結論づけた。また、口語文体からのはたらきかけを、口語文体における片仮名表記の「受け入れ易さ」と呼び、「表記選択において、特定の選択をする、あるいはしないことを促さないこと。」のように定義した。

しかし、これら考察の結果得られた知見は、片仮名表記への移行を促進した要因であり、移行の動機ではない。

移行の動機について考えるには、『太陽』以前にさかのぼって調査し、考察していく必要があると思われる。本稿は、『太陽』以前に発行され、後に『太陽』創刊号へ吸収された博文館の雑誌を資料として取り上げ、深澤(二〇〇三 a)と同様の調査を行うことにより、これらの雑誌が、表記選択を観点とした場合に『太陽』とどのような連続性を持った資料と言えるかを論じる。動機の考察を始める前に、考察に必要な資料の位置づけを行うのが目的である。

二 調査資料と調査方法

『太陽』は、それまでの博文館発行の諸雑誌を統合する形で創刊された。これら『太陽』に吸収された雑誌を、本稿では「『太陽』前誌群」と呼ぶ。坪谷善四郎によれば、『太陽』は直接には『日本大家論集』『日本商業雑誌』『日本農業新誌』『日本之法律』『婦女雑誌』の五誌の統合により創刊された。⁽³⁾『太陽』前誌群には、これら五誌それぞれの前誌も含まれるが、本稿では『太陽』に直接し、発刊期間も他の前誌に比べて長いこれら五誌を『太陽』前誌群の主雑誌と捉え、調査資料とする。⁽⁴⁾資料は、各誌、創刊年月から一年おきに、創刊月と同月の一冊ずつ(隔週発行になっている場合は、月の始めの一冊)を抽出し、資料とした。具体的には(1)の通りである。(1)のうち、韻文・タイトル・引用・表を除いた散文部分を調査範囲とする。⁽⁵⁾

- (1) 『日本大家論集』①第一冊(明治二〇年・六月) ②第二三冊(二一・六) ③第二五冊(二二・六) ④第二卷第六冊(二三・六) ⑤第三卷第六冊(二四・六) ⑥第四卷第六冊(二五・六) ⑦第五卷第六冊(二六・六) ⑧第六卷第六冊(二七・六)・『日本之法律』①第一号(二一・二) ②第一四号(二二・二) ③第二卷第三号(二三・二) ④第三卷第三号(二四・二) ⑤第四卷第三号(二五・二) ⑥第五卷第三号(二六・二) ⑦第六卷第三号(二七・二)・『日本商業雜誌』①第一号(二三・一〇) ②第二四号(二四・一〇) ③第二卷第一九号(二五・一〇) ④第三卷第一九号(二六・一〇) ⑤第四卷第一九号(二七・一〇)・『婦女雜誌』①第一卷第一号(二四・一) ②第二卷第一号(二五・一) ③第三卷第一号(二六・一) ④第四卷第一号(二七・一) ⑤『日本農業新誌』①第一卷第一号(二五・一) ②第二卷第一号(二六・一) ③第三卷第一号(二七・一)

調査は基本的に深澤(二〇〇三a)と同様に、(1)の散文に含まれる外国地名のうち、「英」「英国」などの簡略表記を除いたものを用例として採取し、文体との関わりを視点にまとめる。ただし、『太陽』前誌群には、『太陽』と異なり漢字片仮名交じり文の文章が範囲中に見られる。よって、まず三節において調査範囲について、文語文体・口語文体の割合、及び漢字片仮名交じり文と漢字平仮名交じり文の割合の調査結果を挙げて『太陽』との資料的な連続性を指摘する。その上で、四節において調査範囲の漢字平仮名交じり文中における外国地名の漢字表記・片仮名表記についての調査結果を示し、深澤(二〇〇三a)による結果との関係を考えて見たい。

三 『太陽』前誌群における文体

調査範囲には、延べ2810例（349語）の外国地名が含まれる（ただし、中国・朝鮮半島の地名でもともと漢字表記し
 かされないものは除く）。これらの外国地名が含まれる文章について、漢字片仮名交じり文のものと漢字平仮名交じ
 り文のものと⁽⁶⁾の文章の数を示したのが表1である。⁽⁷⁾

総合雑誌である『太陽』との比較を行うには合計欄によるのが適當だが、各誌の内訳が明治二二年までと二三年

以降では大分異なるため二分して述べる。まず二二年までを見ると、

表1 漢字片仮名交じり文と漢字平仮名交じり文

明治	20	21	22	23	24	25	26	27
論集	12	4	2	24	15	9	6	
	1	14	19			8	9	15
法律		14	5		—			
		4	2	12	—	4	5	2
商業				2	1		—	—
				13	14	24	—	—
婦女					3	2	13	7
						2	1	
農業						4	3	9
計	12	18	7	26	16	11	7	
	1	18	21	25	17	42	30	33
上段	…片仮名交じり文			…平仮名交じり文				

以降では大分異なるため二分して述べる。まず二二年までを見ると、『日本大家論集』においては、ほとんど片仮名交じり文のみになっている。『日本之法律』では二一・二二年ともに片仮名交じり文優勢だが、平仮名交じり文の割合は二二年の方が高い。まとめると、合計欄のように、片仮名交じり優勢から平仮名交じり文優勢へと移行している。次に二三年以降の合計欄を見ると、二三・二四年にはほぼ同数だったのが、二五・二六年には平仮名交じり文が優勢となり、二七年には全て平仮名交じり文となっている。平仮名交じり文の割合が高いのには、この期に発刊された雑誌が終始平仮名交じり文優勢であることもあるが、二二年以前から刊行されている『日本之法律』においても二三年以降

表2 片仮名交じり文における文語・口語文体

明治	20	21	22	23	24	25	26	27
論集	9 3	4	2	13 11	8 7	5 4	4 2	
法律		14	5		—			
商業				2	1		—	—
婦女								
農業						2	1	
計	9 3	18	7	15 11	9 7	7 4	5 2	

表3 平仮名交じり文における文語・口語文体

明治	20	21	22	23	24	25	26	27
論集		11 1	12 3			8	9	4 11
法律		4	2	13	—	4	5	2
商業				12 1	14	22 2	—	—
婦女					3	2	13	7
農業						4	3	9
計		15 1	14 3	24 1	17	40 2	30	22 11

上段…文語文体 下段…口語文体

には全て平仮名交じり文になっている。「日本大家論集」は二三・二四年で全て片仮名交じり文となっていることから傾向が異なるように見えるが、深澤(二〇〇三b)⁽⁸⁾で述べた通り、これも平仮名交じり文優勢へという流れの中で捉えられるものである。以上のように、表1からは、五誌が段階的に平仮名交じり文優勢となり、「太陽」の状態に近付いていることが読み取れる。

表2・表3は、片仮名交じり文・平仮名交じり文それぞれについて、文語文体・口語文体の別を示したものである。⁽⁹⁾表2に示した通り、片仮名交じり文で口語文体の文章があるのは「日本大家論集」のみである。これは、この

雑誌が講演等の速記録雑誌となっていることによる。⁽¹⁰⁾それ以外の雑誌では、

- (2) 西南ニ馳走シ濠洲
- メルボルン港ニ一週間
- 滞在シ夫レヨリシドニ
- 一港ニ入り錨泊一週日、
- (中略)而シテ夫ヨリ
- 直ニ歸途ニ上ル由ナリ
- (「商業」②五九)⁽¹¹⁾

(3) 被告ガクタセキーハ西班牙ノ商人ニシテ其本國マドリットニ在ル某外國貿易會社ノ支配人ナリシカ一千八百十年一月被告ハ英京倫敦ノ甲會社ニ依頼シテ貨物買入ノ事ヲ囑託シタリ (『法律』①三三)

(4) コロムブス (中略) 等ノ諸人カ亞米利加探究ヲ企テタル通路ヲ示ス所ノ西印度及南亞米利加北岸ノ地圖、其他當時ノ紀ネント為ルヘキ歴史上ノ遺物ヲ蒐集シテ之ヲ政府出品ノ部ニ陳列セントス (『農業』①五七)

のように、外国地名を含む文章で口語文体のものはない。次に、表3合計欄に注目すると、二一年から二六年にかけては、文語文体の方が圧倒的に優勢である。また、各誌の各年とも文語文体の方が優勢である。二〇年は文語文体の文章が見られないが、口語文体の文章も1つのみであるので、文語文体優勢の傾向を否定するほどではない。二七年の『日本大家論集』のみ口語文体優勢だが、合計欄を見ると全体的には文語文体優勢であることが分かる。このように、二七年までの文語文体優勢の傾向は、『太陽』初期における、文語文体の文章の方が圧倒的に優勢な時期と連続してとらえることができるだろう。文章表記が、片仮名交じり文から平仮名交じり文へ移行している中で、文語文体優勢の状態は引き継がれたまま『太陽』に至っているとまとめられるのである。

四 漢字平仮名交じり文における外国地名の表記選択

前節で見た通り、前誌群は片仮名交じり文から平仮名交じり文への移行を経て『太陽』につながる。『太陽』との連続を考えるためには、まず平仮名交じり文における外国地名の様相を見るのが妥当であろう。そこで、本節では平仮名交じり文における外国地名と文体との関わりを見ていくことにする。

表4 文語文体における漢字表記

明治	20	21	22	23	24	25	26	27
ローマ		2	1	1	2	2	1	
ドイツ		1	1		3	2	1	2
ヨーロッパ			1		1	2		2
フランス					2	3	2	2
アメリカ				2		2		1
ハワイ						2		
イギリス		1	1					
イタリア		1		1		1	1	2
ロシア			2		1	1	3	2

表5 文語文体における片仮名表記

明治	20	21	22	23	24	25	26	27
ローマ			1					
ドイツ			①				①	①
ヨーロッパ						①		
フランス				①		②	①	
アメリカ				①		①		
ハワイ					1			
イギリス						①		
イタリア						①		
ロシア						①		

調査範囲中に現れた外国地名のうち漢字表記・片仮名表記ともに行われているもので、出現頻度の高い「ヘオランダ」⁽¹²⁾までを対象に、文語文体・口語文体の別によって、漢字表記・片仮名表記のいずれが行われているかに注目してまとめたのが表4～表7である。各地名各年の欄のうち、左側の白の欄には文章中にその地名が1例のみ見られる文章の数を、右側の網掛けの欄には文章中にその地名が複数見られる文章の数を示した。外国地名には、(5)～(8)

の「ドイツ」「ヘローマン」のように漢字表記・片仮名表記・ルビ付漢字表記の例があるが、(7)のように平仮名ルビのものは漢字表記の例として表4に含めた⁽¹³⁾(表6には該当なし)。また(8)のように片仮名ルビのものは漢字・片仮名並列表記と考えられるが、本稿では、これを含む文章の数を丸数字で表5に示した(表7には該当なし)。

(5) 獨乙は彼の統計學の發生せし所にして今日と雖も統計事務の整頓すること萬國に冠絶す〔法律〕①四二

(6) 西洋の諺に曰くローム府は一日に造成せられずと是れ此のローム府は衆多の職工刻苦

表6 口語文体における漢字表記

明治	20	21	22	23	24	25	26	27
ローマ		2	1	1				3
ドイツ		1	1					3
ヨーロッパ		2	1	1				4
フランス	1		1	1				1
アメリカ		2						3
ハワイ		1						1
イギリス		1	1	1				1
イタリア								2
ロシア			2					2

表7 口語文体における片仮名表記

明治	20	21	22	23	24	25	26	27
ローマ								
ドイツ								
ヨーロッパ								
フランス								
アメリカ								
ハワイ								
イギリス								1
イタリア								
ロシア								

強勉數十年の久きを経て始て隆盛を致せるを云ふなり〔論集〕②(二九)

(7) 彼の獨逸が近來勝利を全世界商業場裡に得るに至りたるは此の商業視察者を利用するに由る。〔商業〕①

九)

(8) 長男徳太郎は早世しぬ、二男卷藏は醫學士にて今私費もて獨逸に留學せり〔婦女〕④(一四)

まず文語文体における様相を見ると、表4・5を比べて分かるように、文章總數(母數)の少ない二二年までにおいても、總數の増える二三年以降においても、文語文体では漢字表記の例の方が多い。漢字表記の方が多く行われていることは「太陽」と同様だが、文語文体における本行での片仮名表記の例が、(6)の「ローム」2例と

(9) 朝鮮國及びハワイ國へ輸入するもの、尤も重なる物及び輸出する者の尤も重なる物を問ふ〔商業〕②(二一)

の「ハワイ」1例計3例のみであることを考えれ

ば、この差は『太陽』における場合よりも明確であるとも言える。

口語文体でも、表6・7に表したように漢字表記の例の方が多い。これも『太陽』における場合と同様ではあるが、注目されるのは、表7に見られるように、片仮名表記の例が二七年の「イギリス」1例のみであることである。

(10) 代議士の中にクスリ袋くすりふくろと云ふ名がある、アレあれを薬袋ぐすりと讀むとも思付まい、(中略) 若し之を外國發音的文字に書いたら、ミナイとクスリ袋と間違ゆる事はない。斯の如く漢字で書けば云々、イギリスで書けば云々、(中略) 今日の世界の中に錯雑して居る時はありません。(『論集』⑧九)

片仮名表記の出現数の少なさは、一見口語文体の文章の少なさを反映しているようにも見えるが、口語文体の二七年と同じく本行片仮名表記の例を含む文章が見られる文語文体の二一年・二四年と比較すると、必ずしもそうとは言えない。口語文体の二七年では漢字表記の例を含む文章が29であるのに対して、文語文体の二一年では10、二四年では17であるからである。このような、口語文体における漢字表記と片仮名表記との差は、『太陽』における場合と比べると特徴的である。『太陽』においては、出現頻度の高いもの(ヘイギリスンヘアメリカンヘドイツンヘロシアンヘヨーロッパンヘフランスンなど)であっても、口語文体において片仮名表記される例が、複数の地名で複数の文章において見られた。表6と表7の差は、『太陽』前誌群においては、『太陽』においてよりも、口語文体の文章で片仮名表記外国地名が出現しにくいことを示していると考えられる。⁽¹⁵⁾

深澤(二〇〇三a)は、『太陽』において文語文体の文章中よりも口語文体の文章中の方が片仮名表記が行われやすいのは、口語文体における片仮名表記の受け入れ易さのためであるとした。『太陽』以前からあったと思われる

漢字表記から片仮名表記へという方向性が、口語文体における片仮名表記の受け入れ易さにより促進されたと考えられるのである。また、先に挙げたような出現頻度の高い地名は、漢字表記選択が固定される傾向があるが、そうした地名で口語文体において片仮名表記される例は、口語文体のもつ片仮名表記の受け入れ易さにより顕在化した漢字表記から片仮名表記へという方向性が、漢字表記を選択する力よりも強くなった結果、片仮名表記が選択されるようになった例であると考えた。

これに対して前誌群では、口語文体の文章において、出現頻度の高い地名の片仮名表記の例が『太陽』と比べて少ない。片仮名表記への方向性が前誌群の時期には『太陽』ほど顕著になっていないとも考えられるが、仮に片仮名表記へという方向性が前誌群に表れているとしても、漢字選択固定の力の方が、その方向性よりも強く働いていると言えるだろう。ここで、3節に述べたように、前誌群に見られる口語文体のほとんどは、講演や演説を記録したものの、いわば「話すように書く」ことが念頭に置かれた文章であることに注目したい。『太陽』における口語文体が、口語体として確立していった時期にあたるのに対し、前誌群における口語文体は、まだ口語体として確立していない時期にあたるのである。深澤(二〇〇三a)は、片仮名表記の受け入れ易さが、「話すように書く」文体によるものではなく、従来の語法にとらわれない、と同時に従来の書記法にとらわれない文体を確立させたことによるとした。文体が口語文体として確立してない時期にあたる前誌群の文章は、まだ片仮名表記の受け入れ易さを生じさせるほど文体が確立してないとも言えるだろう。文体が口語体として確立してないために、従来の書記法によりやすいと考えられるからである。表6・7は、まだ片仮名表記の受け入れ易さが、文体に依拠し、表記選択に働きかける作用として機能しきれない状態にあることを示していると考えられるのではないだろうか。

五 まとめと今後の課題

以上本稿では『太陽』前誌群における漢字平仮名交じり文の外国地名表記選択に注目し、片仮名表記が選択されにくいことを調査結果として得た。そしてこれにより、前誌群の平仮名交じり文の文章は、片仮名表記の受け入れ易さがまだ確立されていないものであることを述べた。ただし、このことは片仮名交じり文との関係からも考察されるべきであろう。このことをふまえて、前誌群の漢字片仮名交じり文における外来語表記選択について考察し、片仮名表記への移行の動機を探るのが今後の課題である。

注

- (1) 深澤愛「漢字平仮名交じり文中における表記の選択——博文館『太陽』における外国地名の漢字表記と片仮名表記——」『日本語科学』一四(二〇〇三)。以下、(二〇〇三a)とする。
- (2) 調査の結果、指摘したのは以下の二点である。①口語文体には片仮名表記の「受け入れ易さ」がある。②使用頻度の高く漢字表記が主流の地名に片仮名表記が選択されるのは、口語文体のもつ「表記の受け入れ易さ」により、漢字表記から片仮名表記へという方向性が顕在化したものである。
- (3) 坪谷善四郎『博文館五十年史』(博文館一九三七年) 九三ページ。『博文館五十年史』には『日本農業雑誌』とあるが、これは『日本農業新誌』を指しているものと思われる。
- (4) この五誌以外には、『日本之警察』(『日本之法律』前誌)、『日本之文華』(『婦女子』(『婦女雜誌』前誌)、『日本之女学』(『婦女子』前誌)などがある。これらを特に取り上げないのは、その全容が未詳であり、現段階で知り得たものを含めることで、かえって対象とする資料の範囲が漠然としたものになることを避けるためである。なお、五誌以外の前誌が見せる傾向は、五誌と大差ないものと思われる。『日本之文華』第二冊(二三年六月)の例を注7・9

に挙げる。

(5) ただし、「日本之法律」④、「日本商業雜誌」④⑤については、所在不明等のため、本稿では取り上げることができなかつた。今後の調査に俟ちたい。

(6) 中には漢字片仮名交じり文中、韻文が平仮名交じりになっているなど、片仮名交じりの部分と平仮名交じりの部分を持つ文章もあるが、割合の多い方を主と考えて、どちらかに分類した。

(7) 『日本之文華』第一冊では、「婦女雜誌」と同じく、外国地名を含む文章は、平仮名交じり文のもののみ(文章数5)である。

(8) 深澤愛「漢字片仮名交じり文・漢字平仮名交じり文と外来語表記——『日本大家論集』を資料として——」『国語文字史の研究7』(和泉書院)二〇〇三年。以下、(二〇〇三b)とする。

(9) 文語文体・口語文体を分けるにあたっては、森岡健二『近代語の研究 文体編』(明治書院一九九一年)の分類に従った。また、表2について、「日本之文華」も『婦女雜誌』と同様、該当例はない。表3について、「日本之文華」も『婦女雜誌』と同様、文語文体のもののみ(文章数5)である。

(10) この点については、深澤(二〇〇三b)で述べた。

(11) 以下、用例の所在は「雑誌略称・巻号(1)に挙げた丸数字で示す」・頁」の順で示す。また、用例引用中、ルビの箇所・傍線は原文のままである。

(12) 深澤(二〇〇三a)では、同様の調査を行うにあたって延べ語数が100例以上のものを取り上げた。しかし、本稿の調査範囲では、100例以上の用例が現れるものが少数であるため、50例以上のものについてみていくことにする。

調査範囲に見られた地名は、出現頻度の高い順に以下の通り。シナ、ローマ、ドイツ、ヨーロッパ、フランス、アメリカ、ギリシャ、ハワイ、インド、イギリス、イタリア、オランダ、オーストリア、アジア、ロンドン、スペイン、ロシア、エジプト、ニューヨーク、パリ、ユダヤ、ポルトガル、アフリカ、ゼルマン、メキシコ(以上20例以上)のもの。以下略)

(13) 平仮名ルビの例を含む文章は、二三年へドイツンへフランスンへアメリカンへオランダン二四年へヨーロッパン二五

年へドイツに各1ずつ、二七年へドイツに4つである。二七年へドイツ4のうち3つは同地名が複数例、それ以外は全て、同地名が1例のみ現れる文章である。

(14) 行本来の大きさの活字(ルビなどではなく)が用いられている行。(7)で言えば「彼の獨逸が…」が本行。

(15) (13)に示した通り、この「イギリス」は厳密には地名の例とは言えない。もしこれを地名の例と認めなければ、この点はより強調される。

【資料所在】

- 『日本商業雑誌』第一号・第二四号：関西大学付属図書館蔵本／第二卷第一九号：東京大学法学部近代日本法政史料センター
 『明治新聞雑誌文庫蔵本』『日本之法律』第一号：香川大学付属図書館蔵本／第一四号・第二卷第三号・第四卷第三号・第五卷第三号・第六卷第三号：東京大学法学部近代日本法政史料センター
 『明治新聞雑誌文庫蔵本』『日本之文華』第一冊：立命館大学人文系文献資料室蔵本
 『婦女雜誌』「国立国会図書館所蔵近代日本婦人雜誌集成」マイクロフィルム
 『日本大家論集』立命館大学付属図書館蔵本
 『日本農業新誌』同志社大学付属図書館蔵本

(大学院後期課程学生)

SUMMARY

Alternative notation of foreign place names in mixed kanji-hiragana orthography in the Middle Meiji era

Ai FUKAZAWA

This paper clarifies the alternative notation of foreign place names, written in kanji or katakana, in 5 magazines issued in the Middle Meiji era by *Hakubunkan* 博文館. The magazines are *Nihon taika ronshu* 日本大家論集 (1887-1894), *Nihon no horitsu* 日本之法律 (1888-1894), *Nihon shogyo zasshi* 日本商業雜誌 (1890-1894), *Fujo zasshi* 婦女雜誌 (1891-1894), and *Nihon nogyo shinshi* 日本農業新誌 (1892-1894), which were absorbed into *Taiyo* 太陽 (1895-1928).

For the purpose of this study, I divide foreign place names into those that were already well-known in Japan in kanji notation, and new ones, which were written in katakana. I investigate for which writing style, former writing style or colloquially-based written style, katakana was more frequently used. As a result, it emerges that writing all names in katakana was rarely done in either style, and almost all examples are written in kanji. This changes in the case of *Taiyo*, as a colloquially-based written style more easily accommodates a choice of writing in katakana.

According to this result, I draw the following conclusion: the Middle Meiji era, in which these 5 magazines were issued, was a stage in which colloquially-based written style was becoming established as one of the styles of writing in Japanese. This process of consolidation had not yet reached the stage where the choice of notation, between kanji or katakana, could be decided, and therefore a newly developing notation system such as katakana was not easily taken up at the beginning.

キーワード：外国地名 片仮名表記 表記選択 口語文体 『太陽』前誌群